



Title	大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷雕題』について
Author(s)	井上, 了
Citation	懐徳堂センター報. 2004, 2004, p. 77-93
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/24365">https://hdl.handle.net/11094/24365</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 大阪府立中之島図書館蔵『毛詩品物図攷彫題』について

井 上 了

### はじめに

『毛詩品物図攷』とは、岡元鳳の本草書である。天明五年刊本として広く流布しており、掃葉山房石印本（宣統二年）や台湾影印本も存在する。二〇〇二年には山東画報出版社から王承略氏による簡体字点校本が発行され、容易に閲覧できるようになった（ただし点校本の底本は宣統石印本）。紙幅の関係上、該書の詳細については校点本の「整理本序」に譲りたい。

さて、中井桐園『天楽楼書籍遺蔵書目』（懷徳堂文庫蔵、天保五年抄本）五番ホに「先生頭書」として「毛詩品物合卷一冊」とあり、中井天生『水哉館遺編目録』には『履軒先生雕題 毛詩品物攷一卷 未刊』が掲げられている。俗に『毛詩品物図攷彫題』と呼ばれるものだが、従来、その内容はもとより、原本の所在すら未詳とされていた。

筆者は大阪府が所蔵する履軒の著作について基礎的調査を行なった際、府立中之島図書館蔵の天明刊本『毛詩品物図攷』の欄外に大量の書入を確認した。該館の図書カードはこれを「中井碩果書入本」とするが、その筆跡は碩果のものに似ず、筆者の見るところでは履軒の手に酷似する。またこの書入には塗抹訂正の跡が幾重にも残されており、既に完成していた雕題を他者が転写したものとは思われない。さらに、この書入の内容は、履軒『左九羅帖』『画鑑』に示された説と部分的にせよ一致する。筆者は、こ

れが履軒自筆の『毛詩品物攷彫題』か、すくなくともその極めて忠実な抄本であろうと推断する者である。

いま当該資料を紹介し、翻字を試みる。菲才ゆえの謬は諒されたい。

### 凡例

底本は、大阪府立図書館蔵『毛詩品物図攷』（天明五年杏林軒五車堂刊本）。昭和十三年六月七日受入。請求番号「一八三・三／六四」。資料番号「二九二・三八」。旧蔵者を示す識語や印記などは認められない。版心の状態から合綴本と思われる。

底本に施された書入のみを摘録する。本文への朱線引や塗抹などは、悉く之を略した。

書入に対応する本文の箇所については、巻数と表題のみを示す。ただし、特に本文（対応箇所）を示す必要がある場合のみ、本文を「」内に引用した。

いわゆる正字や俗字の類は、原則として当用漢字に改めた。また変体仮名等も現在一般に用いられている仮名表記に改めた。

虫損などにより判読不能な箇所は「□」とし、同定に至らなかった文字は「Ⅱ」とした。また適宜、句読点等やルビを補った。なお、片仮名のルビは原文にあるもの、平仮名のルビは井上が補ったものである。

毛詩品物圖攷卷一 雜題

參差荇菜 アサ、

或曰、古之荇菜、今之蓴菜矣、本草諸書並不當据、今之荇不中食菜、字無所當、采之亦不可筭、昔人云、「江東人食荇、」蓋謂蓴也、非後世之荇。

凡荇蓴根著于水底者、其莖甚長、隨水之淺口、此圖無長莖、且沒釵股形、又不見葉浮水面之勢口失之。

根生長莖而花葉着于莖也、水底之根不得徑生花葉矣、若此圖、与蓴無异。

于以采蓴 カハラハ、コ

按、以繁衍易生得名、是也、然其得名在漢地也、今以蜻蛉州難生、疑佐渡產者、則誤矣、夫風氣各國寬別、豈可一概以名求之哉、是圖恐舛、当以佐渡產者為真。

此圖是常之ハ、コ矣、未觀カハラ之狀、

名物解云、「佐渡產者、莖葉似艾、葉向背皆白、皤然。」

于以采蘋 ドウガメノカヰミ

朱伝据陸疏混大小而言、其實非誤認也、仍是大辨之意矣、但欠詳耳。

陸疏云、「蘋、今水上浮萍是也、其大者謂之蘋、小者曰萍。」

蘋浮于水面、葉与水平、此圖失其象。

于以采藻 モ

按衮衣十二章、藻居其一、古制雖不可考、而今錦文染色多作藻文、皆長莖宛轉旁生葉、蓋十二章之遺也、今川水中往々見此物、即古所謂藻也、世俗

未知何稱謂非如蓬蒿細絲魚鰓者、又非馬藻、但宜以形狀求焉已。

海藻和名ナノリン、形狀略与宛轉旁生葉者相類、似可相徵。

陸璣云、「茅之白者、古用包裹礼物、以充祭祀、縮酒用、」今按所謂白者、指葉也、茅中有此一穗、非指花穗。

彼茁者葭 ヨシ アシ

俗說、葭蘆葦為一物、邦名与之、蓋以其大為良材也。

莢蘆荻荻為一物、邦名安之、蓋以其小為不材也、唯葦中實別為一種、別有陸生者、較堅實、邦名遠伎、未得漢名、俗以荻充之、非也。

ヨシアシノ名ハ右ノ如クニテ、サテ專ニアシヲ大名ト云ヘシ、和歌ニヨシアシヲ連テ詠スレトモ、トリハナチテハアシト詠ナリ、ヨシトバカリハ詠コトナシ、然ヨシハ元草名ニアラズ、縁語ナリ。

匏有苦葉 ヒサゴ

甘可食如瓜者為瓠、不可食唯可包裹收藏物者為匏、制字自有意。匏未嘗有不苦者也、不苦即非匏。

采芣采菲 葍スカンパウ 菲未詳

有俗名「唐菜」者、又唐菜ノ中ニ有高菜有賤菜、是即葍菲云。

唐菜ハ菘トモ云、然ハ古名葍菲、今名菘ナルニヤ。

加茂之淹菜有名、蓋菘云。

誰謂荼苦 ノヂサ

此圖說皆謬、朱伝「荼苦菜、」非以「苦菜」為草名也、是論荼之味耳、正与

「薺甘菜」作对也、猶謂轉為惡木、蓬蒿為惡菜也、朱伝又云「蓼屬」与良  
相「茶蓼」之茶同、在是詩、不可易者。

〔経有三茶〕惟有二茶而已。

是圖全是薺矣、薺之無刺者可食、豈苦菜耶、果然宜誤以ヒメアザミ也、又  
月令称「苦菜秀」、若薺花不得称秀、是皆可疑。

其甘如薺 ナツナ

朱伝「甘菜」、非以為草名也、説詳于前、此謬耳。

自牧帰蕒

〔伝蕒茅之始生也〕伝「茅」下疑脱「秀」字。

所謂「茅針」、是茅秀之初生者、非茅也。

爰采唐矣 ネナシカツラ

〔爾雅唐蒙女蘿云々〕当直以爾雅為誤、不必回護。

緑竹猗猗 タケ

本或作「菖」、故有王芻解耳、今註疏本亦然、未嘗以緑為王芻也、今集伝本  
作「緑」、蓋古来有兩本也。

葭莩揭揭 ヲキヨシ

前見。

芄蘭之支 ガ、イモ

芄蘭、ユフカホ。

邦名「夕顔」、華葉略如牽牛、花白而紫、細而四出、結実円長如丁香、故  
俗名「丁子茄」、其一頭円、一頭鋭、円頭帶萎花之莖久不凋、正類平鰭之形、  
又三五累、者類平鰭、蓋詩所謂「芄蘭」是也、若「蘿摩」、朱子不觀鰭之  
狀、蓋失之。

今人往々謂芄蘭諸花為夕顔、亦謬、此謬亦旧矣、如国詩「夕顔棚下納涼」、  
蓋指芄蘭也、失古義。

一葦杭之 見葭

一葦、謂小舟、非物産。

焉得諼草 ワスレクサ

集伝誤以合歡為草名以解也、不必回護。

護花美、觀之可以忘憂、故名焉、非食之、本草諸説、亦皆謬。

彼黍離離彼稷之穗 黍モチキビ 穂ウルキヒ

大倉州志云、朱伝「似蘆高丈余」、是蘆粟トウキヒ、非黍。

或曰「粟也」、是謬説。

曲礼有「飯黍」語、黍亦非不以為飯。

中谷有蓷 メハジキ

「離」、疑当作「蓷」、字似佳、与「蓷」之「蓷」異。  
爾雅、「蓷、蓷」也。

彼采蕭兮 カハラマツハ

集伝從陸疏也、其言「蕭荻也」、蓋有脫誤耳、「牛尾蒿」亦見于陸疏。所圖是蒿類、非蕭也。

彼采艾兮 ヨモギ

艾独不明其莖葉、何也。

丘中有麻 アサ

麻之為穀、是今之胡麻、非可統之麻、子雖可食、不可以為飯粥。

方秉蘭兮 フチバカマ

湖之王子濱有沢草綠樹而生高四五尺、每枝五葉、夏發白花、狀似今之蘭、花白而小、或曰、「此乃古之蘭矣」、是說似得當、旧解蓋失之。

是草和名無邊、為貢獻之品、鄉人呼為「郁子」者蓋無稽。

据湊洧之詩、是芍藥開花之時、春末夏初、乃古之蘭今之蘭皆未有花也、遊人若秉、無花之草、其何為。

不能執稻粱 稻イネ 梁アハ

古曰「梁」、今曰「粟」、不得相解也、朱伝謬。

俚言訛謬、粟奪梁名、非「梁隱」。

梁黃穀、故稱「黃梁」、亦有白梁、故以分焉、又曰、黃梁俗間蓋以「黃粟」為定名、而後遂去「黃」、單呼「粟」也、名稱之轉移、多此類已。

薺蔓于野 ヤブカラシ

今和ノ「サンキラヒ」ト云モノ、薺ニ似タリ。

采苦采苦 見茶

采苓之「苦」、与谷風茶苦之「茶」不同、宜別出圖也。宜移前茶苦圖入于此。

葭簾簾蒼 兼ヒメヨシ

「兼・簾」古蓋同音矣、可以為簾之艸、故曰「兼」也、「」之有無、不足論已、猶「葦」之与「簾」也、用草為「葦」為「兼」、用竹為「簾」為「簾」。

可以漚菅 カヤ

「カヤ」スゲ

菅一物而有陸生有水生、陸生者一名「葦」、此亦有「山菅」之名。

或云、「菅」ハ名、「スゲ」地名、「菅原」非水沢也、古以菅為筵席、今以為

筵為簾者、無水陸之別。又按、「スゲ」是大名、陸生者為主、而水生者亦同稱焉、彼有「菅葦」之名、而此不異名、不必古今之異也、葦稱「山菅」可也、唯東門之詩、則無水陸之別、是古人亦混用耳。

「秋花」モ茅ナリ、是ハ花白カラズ、一種中ノ別ナリ、別ニ菅名ヲハ混同類ナレドモ別ニ名アリ混ス菅ハ茅ヨリ低小ナル物也、詩云「晝爾于茅」、冬ニナリテ茅ヲ刈ニ夏花ノ者ヲ扱ヘキヤウナシ、此ニテ皆茅ナルヲ知ヘシ。

浸彼苞稂

陸說非。

浸彼苞著 ハコロモ

或云、ハギ漢名未明、或以為胡枝花、或以為天竺花、未詳當否、蓋此即古之著草矣、形狀略與圖經合、惟「花形如菊」一句為未合而已、姑錄備考。

四月秀蓂 ヒメハギ

通雅云、蓂、狗尾草也。是莠族。

〔謝安乃云……〕是郝隆嘲謝安之語、非謝安之言。

六月食鬱及薹 ノブダウ 鬱見木部

〔ノブダウ〕イヌエビ

七月烹葵及菽 葵カンアフヒ 菽マメ

圖說皆謬。

古之葵、是今之蒔矣。

葵與欸冬、二物相類、本草諸書以葵混乎欸冬、而葵失其名、乃更指他物為葵、如錦葵蜀葵是也、雖帶葵名、而非真物、庖厨本草詳弁之、允當。

和名抄引、「崔禹錫食經」云、蒔、和名布木、葉似葵而円広、其莖可煮噉。」所謂葵、蓋指蜀葵耳。

通雅謂、葵為欸冬、雖未詳密、而其差不差。

〔菽〕雖總名、而單莖之、必是大豆、以大豆為之主、而用尤広也。

七月食瓜 ウリ

瓜、ナウリ。

可漬可煮、又可生食、似甜瓜而大、俗名「菜瓜」、「菜」謂蛙也、蓋可用為食蛙之瓜、云芳甜瓜、唯可生食矣、不可烹漬、焉得當常食。

瓠。

瓠似瓜而小、同類而別種、非近本之謂。

毛詩品物圖攷卷二 離題

草野之萃 ウキクサ

既云野之萃、必非水物、宜以毛伝為謬。

朱伝亦從爾雅耳、所謂「賴蕭」、蓋蕭蒿之屬耳、不必深求、若不得其詳者、勿圖可也。

食野之芻 ヒシワ

圖不見釵股蔓生之狀、何也。豈邦名未當耶。

甘瓠累之

瓠甘而匏苦、既在前条、呂說未密。

南山有臺 スゲ

有水生、有陸生、皆是菅矣、陸生者一名臺。若生水中者、不得「南山有臺」之語。

北山有萊 アカザ

萊、シバ。

俗用「芝」字者是也。若藜園圃或湿地沢辺生者、北山恐無之。

薄言采芑 アサギキク

弁解云「チサ」、此宜討其是非。

下莞上簟 ツクモ

莞図者、今図有偏勢者、可憾。

薦与女蘿 サガリコケ

薦、寄生也、但寄生有二類、若桑寄生是木本。其木本、称寄生木可也、其草本、固称寄生草也。後世詩賦所称、並草本耳、無木本。

薦在木部故也、「女蘿松蘿也」、不須曉。

蘿、古訳「古計」、与「苔」同読、蓋以其根不着于地、故為一類已。即寄生之意。

李德裕邪正口弁有言、「松柏之為木、孤生勁特無所因倚、蘿薦則不然、弱不能立、必附他木」、以見薦蘿之為一類甚明。

又楊收伝曰、「蘿薦附灌木」、亦可徴。

蘿実寄生矣、薦元非寄生、其根在土、然延蔓之後、蔓自生根着樹上、放木根、雖有断絶而不死、若寄生草、称準寄生可也、施字根在土在樹皆可用。

木部薦図解宜併于此、故先辨焉。

終朝采緑 カリヤス 見前

王芻、恐非可食之菜。

緑菘通。

白華菅兮 見前

白華菅、謂菅有白華也、菅草名、不問溫否、朱伝亦襲注疏之謬、舍之可也。

露彼菅茅、茅菅。

葍茶如飴 ツボスミレ

葍、「スミレ」ト訓ハ謬也、別物ナリ。

ツボスミレノ花ハ藍色ナリ、紫ト云ガタシ。

「茶苦菜」、当作「茶」。蓼属所謂苦菜、亦非謂草名也、称其辛辣之物也。

蓻之荏菹 エンドウ

荏与菹是二物、伝以為一物、蓋誤。郭璞・李巡釈荏為胡豆、即豌豆矣。菹属有荏、乃合称荏菹亦可然、是詩与麻麦瓜瓞等相連、似非一物。

維縻維芑 梁在前

時珍曰、「赤黍曰藎、白黍曰芑、」似長。

集伝両「粟」字、当削。

維筍及蒲 タケノコ

蒲根可食者、宜図于此。

貽我來牟 來ムギ 牟コムギ

「麥」字從「來」、是「來」者「麥」之本字、音莫穫反、不当作別音、「來牟」即是「麥麴」矣、孟子所謂「麴麥」正与此同。

「麥」者大名也、但与「麴」作對、則為小麥耳、語意與「麴」、「鹿」相類。

以蓐茶蓐

爾雅「茶」作「塗」、註引是詩亦作「塗」。

薄采其芣 ジュンサイ

今蓐菜、色不赤。

或云、今世人所食蓐菜葉無缺、蓋無缺為蓐、有缺為芣、大同而小異。

毛詩品物圖攷卷三 雕題

標有梅 ムメ

梅以為饔飩、尚矣。此以其大名解可也、何必分別小名、且如杭樹、似梅者、焉得用猗毛詩之梅哉。

林有樸橄 クヌキ

橄木名、樸猶叢也、非木名、木之樸、猶草之叢、文書可徵。

唐棣之花 ザイフリ

唐棣解詩甚易、凡有花之木、皆無所妨、唯論語唐棣言「偏其反、」必如梨花海棠花者而後可、恐是與常棣一類、古來解者皆誤。

通雅以為常唐音近、是一物。

凡彼栢舟 ヒノキ

栢、カシハ、マキ、俗名ヒノキ。

扁栢、ヒノキ。

側栢、仏手栢、コノテカシハ。

吹彼棘心 コナツメ

「難長養者」、詩解之泥者、不可從。

此是荊棘之棘而叢生者、又棗之短小者曰棘。所謂圖棘食美者、與荊棘自別。棘棘是二物。

山有榛 ハシバミ

今山徑荒野及沙岸、與荊棘雜生結子如栗者、即古之榛也。和名サ、グリ、俗名シバグリ、有刺喜塞徑路、所謂「榛蕪」是也、陸疏云、「荜栗叢生、大如杼子、中仁皮子、形色與栗無異也、但差小耳、」豈古之榛、與諸家所說樹較高、子形如榛、不得言似栗、而小且不睹榛蕪之義。

此邦所謂「ハシバミ」者、與諸家說合、而味短不中食、恐不足充饔飩、必非古之榛、諸書所載「荜栗」、「栢栗」、蓋亦榛類云。

榛中亦必有大小數種、「樹之榛栗」、是其差大而美者與徑路榛蕪者、蓋有不同。

樹之榛栗 クリ

見栗有大小、座又有異而可知矣。



椅桐梓漆 椅イ、キリ

陸疏云、「梓美桐皮曰椅、今人云梧桐也。」鄭夾騭說同此。  
梧几也、元非木名、宜梧之木、故配桐為名也、古不單呼梧矣。

桐キリ

不得更以「梧」配桐。

漆ウルシ

漆於琴瑟、亦不可欠者、其首尾之銘、豈有須梓者耶、不可言無用於琴瑟。

檜楫松舟 檜イブキ 松マツ

弁解、檜ビヤクシン、非也。ホコカシハナルベシ。

不流束蒲 カハヤナギ

草亦無不可。

無折我樹杞 コブヤナギ

詩之三杞、疑竟是謬說、即合為一物、於詩意無所妨、唯孟子「杞柳」有取於木性不可移、然以帶柳為名、則是柳之一種、與單呼「杞」者不同、宜別論焉。

三杞即合為一、何為不宜、蓋詩於杞取義、唯食料之枸櫞而已矣、其他亦皆無妨礙、則當悉以枸櫞解。

或云、「古人以其山生野生及食料等分別之耳、不當生疑」、是長者之言、而實舛理、今一二弁之、山采杞、旧以為枸櫞而南山有杞、則以為狗骨、夫北

山既已有枸櫞、南山無折我樹杞、是鄉村所樹、若食料之枸櫞、尤為相宜、何故更作杞柳之解、湛、露在杞棘、必以為狗骨、則枸櫞獨不蒙而露者耶、餘可推而知焉。

顏如舜華 ムクゲ

舜華同、文字集略曰、舜地蓮花、朝生夕落者。和名木波知須、据此地蓮、即木芙蓉矣、可備一說。

隰有杞 ネズミモチ

杞、カシ。

杞可以為三木者、故械亦謂之杞、邦名加志、械亦訓加志、或加世、一也、器名転為木名也。

集于苞栩 ハハツ

「ハハツ」イチ。

櫟ノ実ナキモノヲ栩トス、椽同。

万葉ニ「イチノ木」ト詠ス、是ナルベシ、ソノ実ヲ「イチヒ」ト云。

隰有楊 タチヤナギ

「タチ」ノ姓ハツケヌカヨシ。

有条有梅

条柚之条、梅杏之梅、足矣、何必穿鑿焉、凡古人取近于目者起興、而後人必搜窮僻以作解、宜乎其不合。

隅有六駁 ムク

〔駁駁音同〕「駁」・「駁」同字。

山有苞棣

「棣」、大名也、何必論常唐。

隅有樹棣 アリノミ

有無表名、是反語、恐是一物。

蟻喜食梨、故呼梨子為「蟻実」、<sup>ありのみ</sup>「蟻」讀為「有」、有之反為無、故亦呼為「無実」、也、並是梨子矣、不宜別呼棣為「有実」、且「有実」・「無実」皆果名、非木名也、縱令如圖說、梨木既呼為「無」、則棣木當呼為「有」矣、不得帶実字為木名、不然、宜称「アリノミノキ」、亦太冗長。

六月食鬱及薁 ニハムメ

毛伝似長。

常棣之華 ニハサクラ

今世俗所謂海棠、即是棣矣。

何玄子曰、「如垂絲海棠一般」。

凡明諸儒、多言常棣花兩三相麗、此圖殊不相肖、疑是和名未当者。

ニハウメ、以果实為称也、恐非同類。

楊柳依依

「楊柳依」、与「榛栱濟」、語意相類。

「楊柳」、謂楊与楊也、「蒲柳」解誤。

南山有杞 ヒイラギ

南山亦枸杞耳。

薦与女蘿 ヤドリギ

「薦」字從「艸」、必是草本、宜収于草部、本邦旧讀為「都多」、即是蘿薜之属、雖未知所本、恐実得本義也、詩与女蘿同施于松上、必是係蔓矣、若夫葉寄生、是木本安得施哉。

今按、薦蘿属秋後葉紅者、漢画中往、觀施于松上者是也。

按、陶弘景云、「薦是桑上寄生、如蘿松上寄生」、鄭樵曰、「寄生有二種、大曰薦、小曰女蘿」、是諸說未得當、然据此等語可知草本係蔓、亦通称「寄生」焉、已以其根著于樹上也、然則古人积「薦」為寄生、非訛謬也、但後人硬執木本說、遂致大差耳。

維柞之枝 イヌツケ

詩詠柞者五、並同栩櫟耳、是篇唯以采菽・車輦為「鑿子木」、不可曉於詩義、亦無所据。

柞櫟拔矣

柞櫟同、クスギ。

其檉其梧 ギヨリウ

爾雅积「檉」作「河柳」、元是謬說、不可從。

櫻、今有大木、枝似柳、而葉似茵陳者、是也。古人多言「如松」・「似栢」、殊不相類、又其生不必河辺。

靈壽杖、以扶老製者、則口竹也、非栢。

其槩其栢 ヤマクハ

今諸州往、出野蚕繭布、其所食恐是槩或栢、但未有所考。

梧桐生矣 アヲキリ

〔アヲキリ〕アヲニヨロリ

此宜合于椅桐条、在前。

#### 毛詩品物圖攷卷四 雕題

関関雉鳩 ミサゴ

〔有定偶——有別、〕竟是謬解、說詩者之臆度耳。

狀類于鷹鷂、故有「魚鷹」之名、又是山禽、非水鳥、集伝未得其真、所謂

「百聞不如一見」者也。

陸疏云、「雉鳩大小如鷗深目、目上骨露出。」

嘴毛鷹ノ如ク鉤曲ス、面目並ニ象ヲ失。

黄鳥于飛 カウライウグヒス

或云、此図は画眉鳥、非黄鸝也。

格物論云、「鶯大勝鸝鵒黑眉、嘴尖紅、脚青、遍身黄色、羽及尾有黑毛相間、三四月間鳴声音円滑。」形状与本図不合、鶯豈亦有数種、与据金衣黄袍二語、格物論似長。

#### 維鳩居之 ハト

「此鳩不指一種、」是也、但鳩多種類、大抵亦当分二色、曰野鳩、曰家鳩、家鳩鳩也、人家為營巢而棲之、則無事鸛巢矣、居鸛巢者、必是野鳩矣、在野鳩、則不當更論其種。

或曰、鳩無家野之分、其色蒼灰、其声喁々者俗名塔鳩、是為本色、巢于人家者、居于鸛巢者、唯是為多、其他数種皆其文別不當舉論、譬之、家猫毛色肖虎者為本色、而黑白赤斑、亦皆無非猫、人亦不為其黑白而別製名也、犬亦然、故鳩唯一種、毛色分本末可也。或云、鸛字元取合音而製焉、非別有一。

離離鳴雁 カリ

「畏寒、」未得物理。

流離之子 フクロウ

〔流離之為鳥不可改也〕亦可改也。

莫黑飛鳥 カラス

〔皆不祥之物〕「皆」字元帶狐而言也、此摘出一物、宜省「皆」字。

烏鴉元同物、若慈鳥小形者別是烏鴉中之一種、勿以此乱大名、可也。是図、蓋欲画慈鳥小形者也、故失於形象、与說不合。

于嗟鳩兮無食桑葚 コバト

此鳩宜合于前鳩条、是鳩之惡声者、俗云タウバト、豈是与則灰色者也、如鸛鳩、蓋因鷹化為鳩語而製名者、舍之可也。

鳴鳩之鳴、与鳴倉庚之鳴、同非鳥名。

タウバト又称ドバト、豈是ハ与、而鴿亦他種類。

〔集伝似山雀而小〕或云、「山雀」当作「山鵲」。

弋鳧与雁 カモ

鳧亦多類、大抵当分大小二色、其大鳧、青首而已矣、其他諸種皆小鳧矣。是詩所指無大小之弁、但云「主大鳧」則可矣、以大鳧、味尤美也。

〔其踵企、〕謂步時踵不着地也、飛時伸其脚者、特鶴鷺之類長脚者耳、如鳧雁短脚、皆屈脚在腹下。

〔如鴨青色〕所謂「青色」、特其頸頭而已、故有「青首」之称。

肅肅鷗羽 ノガン トウガン

〔無後趾〕、宜言「無後指」也、是四指皆前指也、図少一指。

有鴉萃止 見流離条

フクロフ。

諸家紛紜難弁、今定分三物、

鴉、鼻同、フクロフ、

鴉、ヨタカ、

鴉、ミ、ツク、頭目如猫毛角兩耳ハミ、ツク也。

歎彼晨風 サシバ

晨風、非鳥名、旧解皆謬。

鴈鳩在桑 ツ、ドリ

鴈鳩是鳩中之一種、亦宜合于前鳩条。

〔桔鞠〕・「鴈鳩」未詳文義、然恐是戴菊之義矣、戴勝与鴈鳩不同、頭毛如菊花者是也。

按月令季春「鳴鳩抃其羽、戴勝降于桑」、蓋即鴈鳩分明、与戴勝二物而並為侯鳥、註家釈辞混雜、遂成後人之謬耳。

布穀、ツ、ドリ。

布穀、一名郭公、以為杜鵑之異名者誤、今俗称カツコウトリ、豈是与其音云。

鴈鷗鷗鷗 ミ、ツク ヨタカ

鷗鷗也、見于前条、是与鷗二物矣、鷗亦与鷗鷗不同、三物同類而不当相混。

鷗鷗于埡 コウツル

〔コウツル〕ク、ビ。

「コウツル」是俗称之紕繆、非和名也、昔人不識鷗、以「鷗」字充、此故称其字音如名、今不当循用。

有鳴倉黄

宜合于前黄鳥条。

翩翩者鷗 トシヨリコヒ

〔鷗〕元詁文、当作「鷗」、即「隼」之煩文。

按、今本説文、「鷗、祝鳩也、从鳥隼声、思允切」、〔鷗、或从隼一、作鷗〕。若單从「隼」、必不得「思允切」也、唐本説文則从隼、作「鷗」也。説文一

訛、諸儒不之察、遂用入伝註、永為律令、可歎矣。

脊令在原 セキレイ

〔セキレイ〕ニハコナブリ、ニハタ、キ。  
詩緝云、脊令非水鳥。朱伝襲註疏之謬。

鶴鳴九皋 ツル

「灰蒼色」、恐混鶴鷄也。  
別有玄鶴。

如顰斯飛 シマキジ

此図恐未愜、宜白其頭腹。

宛彼鳴鳩

此鳴鳩、亦宜合于前鳩条。

「鳴」其事也、与「有鳴倉庚」之「鳴」同、非鳥名、且此鳩何必問其種別。

交交桑扈 マメマハシ

マメマハシ得菽粒、則臂中輾轉之、然後能破之、故得是名耳、焉得不食粟。  
其嘴黃臘色、故有「窃脂」之名、伝「青嘴」恐謬、或是蜾蠃之訛。

弁彼鸛斯 ゼンジャウカラス

此図不見腹下白、何也。

匪鵒匪鷃 鶉ワシ

鶉、説文作「鷃」、「从鳥敦声」、与鶉鷃之鶉不同。  
一説、「鶉」是「鷃」之訛、説文即「鷃」之省。

鶉トビ

宜画翱翔自得处。

鴛鴦于飛

爾雅翼云、「頭戴白長毛、垂之至尾」。此図無頭毛、何也。  
是図雌雄無別、恐失当、凡鳥雄美者、雌必不美、鸛鷄雉孔雀皆然。

鳬鷖在涇 カモメ

コノ図、頭ノアタリ千鳥ニ似タリ、鷖ニ似ズ、改ベシ。

鳳凰于飛

鳳為鳥中之皇王、故称「鳳皇」耳、後字加「凡」、無別義、非雌雄之説。  
鳳之形狀無可徵、今所存皆識緯家之言、無足采。  
按、隸続古碑鵠鳳、全如孔雀。

振鷺于飛 サギ

此図殊不得白鷺狀、但肖五位而已、何也。

攀允彼桃虫 サバイ

桃虫、非鳥也、旧解皆謬。

易林是比喻、猶俗言「鳶生鷹」之類、不当用解物理。

毛詩品物圖攷卷五 雕題

野有死麕 ノロ

〔ノロ〕クジカ

ノロ是韓名、非和名。

今諸州有獐、有小角、未知与此圖同異。

集伝、「獐、一歳豕」、「獐、三歳豕、」未詳孰是。

無使尫也吠 ムクイヌ

伝宜言「尫綿犬也。」

豨豨五豨 豨豨五豨 ブタ

野猪曰「イ」、家猪曰「ブタ」、但古並用「豕」字也、故「イ」通于家猪、而「ブタ」則不通于野猪。

于嗟乎騶虞

其謬尚矣。

象之掃也

キサ。

並驅從兩狼兮 才ホカミ

雖有白狼、而茶褐其正色矣、制圖宜從正色。

狼後低、此圖失之。

一之日于貉 ムジナ

謂取狐貉、而單曰貉也。

取彼狐狸 タヌキ

唯狸後足有跟、跟蓋所謂蹠也、貓貉皆無跟。

呦呦鹿鳴 シカ

鹿宜在前麕之次。

象弭魚服 トノ

魚謂鮫魚也、旧説不可從。

維熊維羆 クマ

今肅慎有獸如熊而大、能人立而趨、猛於熊、蓋即羆矣。

羆是有跟如猴。

匪兕匪虎

凡鳥獸諸圖、嬰以火焰者、其本起於龍、而凡不可的知者、以此神之也。兕

非不可知之類、又非神奇、当削去火焰。

有猫有虎

礼記称「其食田鼠、」則猫小於虎、可知矣。

赤豹黃熊

豹似虎、且坊間有全皮、毛色形狀可知矣、何不可圖之有。

毛詩品物圖攷卷六 雕題

蝻斯羽說詵說兮 キリトス ウリクヒムシ

〔キリトス〕是今俗之訛稱、不得以作訓。

陸璣曰、「蝻、蝻蟴也、楊雄云、春黍也、幽州人謂之春箕、〃即春黍蝗類也、長而青、長角長股、青色黑斑、其股似玳瑁文、五月中以兩股相搓作聲、聞數十步。」

鄭夾際云、蝻蝻即一種大青蚱蜢股長而鳴甚響。今按、鄭夾際之說非、蝻蝻宜以論阜蝻。

此圖與陸鄭合。

通雅云、「凡似蝗不為災歲時恒有者、通得蝻名」。又春秋以蝻為災虫、即蝗也、非詩所謂蝻。

邢昺又云斯語辭當以爾雅作「蝻」字作謬。

此解宜添一句、曰「非古詞所詠吉里吉里斯矣。」

趨趨阜蝻 ハタ

阜大也、是大蝻之義矣、解者動以生阜陵為言、皆非。

蝻如蝻 スクモムシ

〔生腐木中〕今生木亦自生虫、不特腐木。

蝻蟴据諸解並說蝻虫耳、果然耶、今按、後世多論蝻蟴是生糞土中、或生果

實、其形狀與蝻虫不相遠、詩之蝻蟴恐或是蝻蟴、未可以蝻虫作定說、但其生糞土中者似別一種、非蝻蟴、宜以果實中為蝻蟴耳。或云、蝻蟴一類二物、糞土曰蝻、果實曰蟴、或蝻蝻也、印大義、故蝻之大者為蝻、義同阜蝻。

スクモ之語、未得其義。如言果蛛、而此与蛛非倫、恐是邦說訛謬轉移者。

蒼蠅之聲 ハ

詩原是「撻」字矣、後譌作「蠅」。

蠅、ハイ也。蓋灰義、云「ハヘ」者、蛇也。中古誤為「蠅」。

蟋蟀在堂 古名キリトス

〔古名キリトス〕イト。

豐国有虫、首如蟋蟀黑色、翼如金鈴子、善鳴好闘、自野入牀下、正如爾詩之侯、鄉名「キナツ」、其鳴闘者皆雌云、蓋此真蟋蟀矣。

大和州亦有此種、俗名「ヤマコヲロギ」、即古詞所詠「キリトス」之真物云。

今俗所謂「キリトス」、即是促織矣、然青色無黑、上所圖蝻與促織合。

蟋蟀之羽 アサカホ

所在有虫狀如白露虫、匪必水上、邑居庭中皆有之、蓋蟋蟀云豈原水虫所化、故水上特多邪。

図白露虫、宜脚着水上、不然不応「群浮」文。

五月鳴蟋 如蟋如蟴 セミ

蟋、クマセミ。

蟬、ヒクラシ。

六月莎鷄振羽 クダマキ

「故名梭鷄」、義不通。

蛭蝟者 蠋 クハノムシ

「クハノムシ」イモムシ。

蠋不必桑、諸木皆有之、諸草亦有之、是詩下有「桑野」句、故解作桑虫耳、乃註家之拘泥。

是図大不愜。

蠋卷葉為巢而居其中、以喻軍士之獨寢也。

此宜図圈葉為巢者。

蠋尾有刺、故人畏憎之耳、図說並没尾刺、何也。

伊威在室 フメムシ セキダムシ

ワラジムシ。

ネコムシ。

フヤジムシ。

「ワラジ」之名、尤得形象、遠勝セキダ、且似古名。

蟪蛄在戸 アシタカクモ

サ、ガニ。

ジヨウロクモ。

燿燿宵行 ホタル

ツチホタル。

張華之外傳多、然魏晉人之詩、豈足以為証哉。

維虺維蛇

虺長廬尺余、末太如割斷者、此図未愜。

伝「七八尺」、蓋訛文耳。

胡為虺蜴 トカケ

蜥蜴、トカゲ。

蟪蛄、イモリ。

守宮、ヤモリ。

蜥蜴、即守宮。

蟪蛄有子 蜾蠃負之 ジガハチ

ナムシ。

クワムシ。

蟪蛄亦宜為製図。

蟪蛄不必桑、諸樹諸草蔬皆有之。

為鬼為蜮

疫病中有痧、蓋瘴癘之類云、古人不之察、以為蜮毒也。蜮之受冤久矣哉。



去其螟螣及其蠹賊 螟クキムシ 螣ハムシ

蠹ネムシ 賊フシムシ

四図恐皆未愜。

蠹賊是一虫、正是合三虫矣。

食根者、蓋螻蛄之小者、所謂蠹也、食桑葉者、即螟蛉屬、亦名螟也。

此邦別有ウンカ、細小而黒、与集豆苗菊苗之虫相肖、是大為害也、虫既長大、生翅而飛去、豈所謂螣邪。

### 毛詩品物圖攷卷七 雕題

魴魚頰尾 ヲシキウヲ

此図鱗大、恐失之。

鱣鮪発発 フカ

此図鼻似太短。

「似龍」、蓋謬。

大魚之說在詩為謬。

江海皆有之、亦有大小、小者一二尺、別種而一類、凡詩所詠、特其小者耳、衛風取其可咒、周頌稱其入于潛、大雅美其可食、非小者而何。

其魚魴鰈

毛亦謬耳、不當為回護。

河魚有一物、鄉名志久智酷、肖鰈而頭頂更扁、味劣於鰈、而形大、其子小弱者塩漬而食、其色如銀、腹中之卵味絶美、此咸鰈耳、所謂「大魚」、魚

子」頗有緣由。

其魚魴鰈 タナゴ

鰈、未詳。

魚麗于罾鰈鰈 鰈シヤジ 鰈ハゼ

〔陸氏以為狹小非也〕小謂其全形、非謬也。

魚麗于罾魴鰈

コノ図鰈ナルコト不明、本草ノ形長体図トモアハズ。何ニヨリテ此ヲ鰈トハ名付シヤ。

魚麗于罾鰈鰈 ナマヅ

頭較小、無鰓形、喙較尖、口較収、凡鰈所以異於常魚者、此図皆失之。

鼉鼓逢逢 カアイマン

文從「鼉」、「鼉」是龜類之大名、鼉非龜類而何、古說皆謬。

長崎聞見録ニ載「ラガル」、形狀此ト同シ、曰、「ラガル、夜ニ海中ニ居ル、長ニ丈許、猛惡、諸魚ヲ食ヒ、人獸ヲ害ス、ニ大涎沫大毒アリ。」

コノ図ト大小ノ異アリト雖、同物ニ似タリ、是龍類ナリ、必鼉ニハ非。

南海有鰐鰕、同長尾利齒害人、有以尾取物、如象用鼻之說、略与此図合。

「ワニ」ノ訓ハ当否イカン。

イツレニモコノ図ハ此ニ入ベキモノニ非。

龍旂陽陽

龍唯宜像在河海者、不当図雲中者。

鱗鱗鯉鯉 ヤナギハエ

鱗ヲ年魚也ト説イカン。

おわりに

今回紹介した資料は、儒教の經典である『毛詩』に関わる注釈書である。しかし現在ではその内容から、むしろ博物学や国語学の専門家によつて研究されるべき資料であると言えよう。このような性質の資料については、資料を発見・紹介し得る者と、紹介・翻字された資料を利用し研究を推進し得る者との協力が必要とされるのである。

このようないわば学際的協力の体制は、懷徳堂や適塾などを研究する際には不可欠とさえ言える。国文学者や漢学者のみによつては懷徳堂の医学を理解することはできず、また医学者や薬学者のみによつて懷徳堂の医書を読解することはできない。懷徳堂文庫にはたとえば、二百年前の水銀温度計や顕微鏡に関する報告が残されているが、古典文で書かれたこのような資料を現代の科学史研究者は正確に読み解けるだろうか。また、そこに記されている内容の科学史的意義を古文や漢文の専門家は充分に理解できるだろうか。懷徳堂という「学問領域」を総合的に理解するためには、文系・理系の枠を越えた研究機能・研究体制が不可欠であり、このような研究機能を提供し得る機関として大阪大学は重要な鍵を五十年間以上も握り続けてきたのである。

懷徳堂は、日本の歴史上きわめて特異な存在である。その営為を伝える懷徳堂文庫は、本学の持つ、非常に大きな知的資産である。本研究科はこれを最も活用できる位置にあるのだが、しかし研究科内における懷徳堂への評価は充分なものではない。

残念ながら、「解体新書以前のわが国の解剖学として、たしかに最も高い水準」（小川鼎蔵氏）の報告が本学に架蔵されていることを知る者は、本学の学生や教職員の間にも少ない。また「顕微鏡についてのわが国最初の文献」（中野操氏）が本学に残されていることを知る者は、さらに少ないであろう。懷徳堂に関する周知・広報は、まず内部学内および研究科内）に対するそれから為されねばならないのである。（なお近年、韓国・台湾・アメリカなど国外の研究者による懷徳堂文庫資料の利用が盛んとなりつつあることは付記しておきたい。）

さて、大阪府立中之島図書館には、今回紹介した資料以外にも、履軒の自筆本や短冊、帖など多数が架蔵されている。明治末に数次にわたり収蔵された資料群であるが、これらの中にはたとえば「懷徳堂」印記を有する中井柚園抄本『履軒弊帚』や、伝中井履軒自筆本『東遊紀行』など、注目すべき資料が多数含まれている。伝来状況の調査も含めた今後の研究の進展を期待したい。

（本センター非常勤事務補佐員）